

身体を動かす意欲を育む 体育的活動

▶愛媛県立今治特別支援学校(小学部)

- 小学部児童数
……72名(男子47名 女子25名)
- 小学部クラス数……17
- 小学部教職員数……39名
- 地域のスポーツ指導者の活用
年間延べ人数……0人

取組時の課題と目的

▶ Plan

1 取組時の課題

本校は、知的に障害を有する児童生徒が学ぶ特別支援学校である。体育的内容の授業は、仲間との関わりを大切に、集団で活動できるように、低・中・高学年の3グループに分かれて行っている。

本年度の健康診断では、小学部全体の22%の児童が肥満傾向(高度肥満が4名、中度肥満が7名、軽度肥満が5名)であった。また、障害の特性上、身体をしっかりと動かすことが難しい児童や、日常的に遊んだり運動したりする経験が少ない児童が多く、高等部卒業後、身体を動かすことがなくなったという話を保護者から聞くことがあり、自ら身体を動かそうとする意欲を育てる必要がある。

2 取組の目的

- (1) 授業や体育的行事で、いろいろな運動を行い、身体を動かす楽しさを体験する。
- (2) 授業や体育的行事で達成感を味わい、身体を動かすことに対する意欲を育む。

取組の内容

▶ Do

1 いろいろな運動を行い、身体を動かす楽しさを体験できる環境の設定

(1) 指導の形態の工夫

1、2年生では、遊びの指導として運動遊びを行っており、遊びを活動の中心に据えて身体を動かすことの楽しさを味わうことを目指して支援している。3～6年生では、教科体育において、身体の使い方や体力の向上を目指して支援している。また、日常生活の指導で、「朝の運動」(ランニングやダンス)に取り組んでいる。

(2) 学習内容表の作成

6年間を見据え、どのような力を身に付けてほしいか整理し、学習内容表を作成している。各学年部で押さえる内容を系統的に行い、経験する運動に偏りがないように取り組んでいる。

2 達成感が味わえる評価の方法

(1) 「がんばりカード」・「がんばり表」の作成

授業や体育的行事の各運動内容において、児童の実

態に応じた「がんばりカード」等を作成し、教員が評価したり、児童が自己評価したりしている。

(2) 児童が頑張ったことを発表する場の設定

授業の最後の振り返り活動で、頑張ったことをみんなの前で実際に行う場面を設けている。また、取り組んできた内容を運動会や学習発表会、マラソン記録会などで発表したり、披露したりしている。

●工夫したこと

- (1) 各グループが同時期に同じ内容を実施できるように学習内容表を位置付け、教材・教具、指導方法など小学部全体で共通理解を図り、支援に当たっている。
- (2) がんばりカード等にどの児童も達成可能な項目を作成し、「できた」「頑張った」喜びを味わえるようにしている。

取組成果の評価

▶ Check

(1) 系統的な体育的活動

体育的活動を遊びの指導に導入し、遊びを活動の中心に据えて授業を行ったため、身体を動かすことの楽しさを十分に味わうことができた。その経験をもとに「体育」に発展していくことができた。

(2) 見える化

体育的内容の活動で、児童が頑張ったことをすぐに目に見える形で評価される経験を積むことで、どの児童も達成感を味わうことができた。また、その達成感が身体を動かす意欲につながった児童が多くいた。

(3) 教職員の共通理解

学習内容表に基づいて、教職員たちが共に「運動遊び」「体育」の内容を決めていくことで、いろいろな運動を行う経験を積むことができた。

今後の課題

▶ Action

- (1) 児童の興味・関心、運動能力の実態に合わせて、指導内容の工夫や改善は今後も必要である。
- (2) 障害の特性を踏まえ、視覚的支援を行い、評価等を行ったが、一人一人実態に配慮したよりわかりやすい評価方法や伝える手段を考えていく必要がある。
- (3) 身体を動かすことに対する意欲を育むことができ

たので、児童一人一人の意欲を大切にしながら、児童に合った効果的な体力の向上の取組を考えていきたい。

- (4) 身体を動かすことに対する意欲を更に高めたり、発展させたりする場を整えていく必要がある。学校だけで行うのではなく、家庭等にも働き掛けていき、生涯を通して充実した生活の足掛かりとしたい。

◎体力の向上の取組がもたらす波及効果

体育的内容の活動で達成感を味わったり、褒められたりする経験を積むことで、ほかの授業でも自信をもって参加する場面が見られるようになった。また、日常生活全般で活動に意欲的に取り組む場面が増えた。

いろいろな運動を行い、身体を動かす楽しさを体験できる環境の設定

3・4年 朝の運動



5・6年 体育



学習内容表(一部)

			1・2年	3・4年	5・6年
10月～12月	基本の運動II	鉄棒	ぶら下がる よじ登る 跳び下りる	低鉄棒での ぶら下がり 跳びつき	低鉄棒での 前回り降り
		跳ぶ	ケンパー 跳び ゴム跳び 遊び	幅跳び遊び 垂直跳び 遊び	短い助走を つけての幅 跳び 垂直跳び

※本校HP参照

達成感が味わえる評価の方法

がんばりカード



※本校HP参照

がんばり表



発表の場



体育的活動の
系統性

見える化
児童の意欲喚起

教職員の
共通理解

身体を動かす楽しさを知ってもらいたい。

卒業後も運動に親しんでもらいたい。

生涯を通して、充実した生活の足掛かりに…

やる気を引き出す体育 できる! もっとやりたい!

▶愛知県立三好特別支援学校(中学部)

- 中学部生徒数
……80名(男子56名 女子24名)
- 中学部全クラス数……18
- 中学部教職員数……37名(内体育専科9名)
- 地域のスポーツ指導者の活用
年間延べ人数……0人

取組時の課題と目的

▶ Plan

1 取組時の課題

できない・わからないからやりたくない!

本校は、知的に障害のある児童生徒が学ぶ特別支援学校である。特に中学部は重度の知的障害や自閉症の生徒の在籍が多く、指導・支援の工夫が必要である。また、運動能力の実態は様々であり、自分の中で経験がなかったり自信のない活動には消極的になったりする生徒も少なくない。生徒が活動に見通しをもち、興味や関心・意欲をもって取り組めるように教材や指導方法を工夫していくことが必要である。

2 取組の目的

- (1) 運動経験を増やすことによって自分の体の動かし方を知る。
- (2) 授業や教材を工夫し環境を整えることで、生徒の意欲や主体性を引き出す。

取組の内容

▶ Do

1 学校生活全体で運動の機会を設ける

(1) 日常生活の指導での取組

本校では、小学部や中学部において日常生活の指導の時間に体操やサーキット走などの体づくり運動を行っている。生徒が好きな音楽に振り付けをしたり、しゃがむ、足を上げるなど全身運動が楽しくできたりするように工夫をしている。

(2) 自立活動での取組

自立活動の時間には、アップダウンのあるウォーキングコースを散歩したり、個々の課題に合わせて踏み台昇降やサーキット走などの体づくり運動などを行っている。重複障害学級の生徒にも毎日継続的に運動をする機会を設けるようにしている。

2 生徒が主体的に活動できる環境づくり

(1) 障害特性を踏まえた指導・支援

自閉症の生徒が多いため、視覚的にわかりやすいようにスケジュールカードを提示したり、ランニングのときには「走る」「歩く」に合わせた音楽をかけたりすることで、生徒が活動に見通しをもち意欲的に活動できるように配慮をしている。

(2) 教材を工夫して生徒の意欲を引き出す

- ① 前述したとおり、本校の生徒は重度の知的障害や自閉症が多く、興味の幅が狭いという課題がある。そこで、生徒の興味を最大限に生かし、生徒が自分から「やってみたい!」と思えるように、生徒が好きな物やアニメーションのキャラクターを教材に取り入れている。
- ② 本校中学部は体育の授業に積極的にタブレット端末などのICT機器を教材として利用している。ICT機器があることで「楽しい!」、わからなかったことが視覚的に捉えられたことで「わかった!」、自分の動きを自分で振り返ることで「できた!」という自己肯定感を高めるなど、内発的動機付けとしての活用を心掛けている。

●工夫したこと

- (1) 授業の流れを統一(ラジオ体操→ランニング→主の活動→整理体操)したことで、特に自閉症の生徒が見通しをもって活動に取り組むことができるようにした。
- (2) タブレット端末の特性を生かして、模倣する力を身に付けるために使用したり、自分の動きをその場ですぐにフィードバックして課題を見つけ、次に生かしたりして利用した。

取組成果の評価

▶ Check

- (1) 初めは落ち着きがなかった生徒も流れを統一したことで、見通しをもち、落ち着いて参加することができるようになってきた。
- (2) ICT機器と教材の工夫により、生徒によりわかりやすい指導ができ、生徒が笑顔で「できた!」と実感できる場面が増え、自己肯定感を高めることができた。

今後の課題

▶ Action

- (1) 全体としては落ち着いてきたが、まだ見通しがもてない生徒もいるため、個々でスケジュールを用意するなどの支援が必要である。
- (2) タブレット端末を更に運動技能の向上につなげられるように使用方法を検討する必要がある。

◎体力の向上の取組がもたらす波及効果

生徒が主体的に学ぶ環境をつくることで、自分から「やりたい!」という気持ちを高め、体育の授業の場面以外でも積極的に活動できる生徒が増えてきている。また、友達と一緒に協力して準備や片付けを行ったり体を動かしたりすることで、自閉症の生徒が苦手としているコミュニケーション能力も伸びてきている。

学校生活全体で運動の機会を設ける



小学部「サーキット運動」



中学部「体づくり運動」



中学部「ウォーキング」

小学部では多様な動き、中学部では体力づくりを目標に取り組んでいる。

生徒が主体的に活動できる環境づくり



ラジオ体操

教員が模範を示すよりも注目して見ることができた



ダンス「エビカニクス」

生徒が好きな踊りのビデオをテレビ画面に映すことで、意欲的に取り組めた

プロジェクターやテレビ画面を使うことで生徒の注目は高まり、模倣しようとする生徒が増えた。

生徒が好きな食べ物やアニメーションのキャラクターを的にすることで、当ててみようと思う生徒が増えた



フライングディスク



自作教材を使って生徒の意欲を引き出し、「もっとやりたい!」という気持ちを育む。



器械運動「跳び箱」



視覚支援教材を使って実際に動きを体験し、その様子をタブレット端末の遅延再生アプリで自分ですぐ見て振り返る。教員からアドバイスを受け、更に頑張ろうとする姿が見られた

わかりやすい視覚支援教材とタブレット端末を使い、達成感が高まり、「できたよ!」という笑顔が見られた。